

唐丹の歴史いろいろ(九)

大船渡市吉浜

木村正継



道親(みちちか)。その奥方の節「勢津とも」は、唐丹にも来たことがある、伊達家五代藩主吉村の隠し子とも言われる。
その節のつらくむなし

などを用いない。)や、お芝居になって長く伝えられた物語でもあります。
ご高齢の皆様の中にはこのお芝居の(金の屏風に立ちより掛かり)「なんと喜右衛門徒然じゃないかほころぶ花をそなた一枝手折ってみぬか?」という文句を記憶している方もいるのではないかと思います。

ました。
飯田能登・節・喜右衛門の菩提寺、桃生郡女川村(現在の北上町)の洞岩山江林寺ご住職様からは歌詞とテープを頂きました。
最後の唄い手さんも歌詞の記録者もずいぶん前に故人となつてしまいました。
口説き歌詞に「南部金石仁助がもとを、尋ね参りて

魚ていさんの「海」(寄席を年二回開催する毎に三千部発行)に寄稿したり、知つていそうな金石の方々を訪問したり、色々な手立てで探しましたが、ついに分かりませんでした。
数年後、偶然に足下吉浜から重要な情報を得て、発見に至りました。
それは、魚市場の近く宮古へ通じる街道の付近にありました。

伊達のお姫様の駆け落ち事件 お節・喜右衛門悲恋の道行き(一)

時は、一七五二年(宝暦二年)四月七日深夜から八日にかけて、所は、北上川が太平洋に注ぐ追波(おっぱ)川の川口付近仙台藩桃生郡女川村(現在の宮城県北上町)、病氣と称して領地に引き籠もり、妾二人に飽きたらず村の娘や若い嫁さん達を日ごと夜ごとに座敷にはべらせ、あらゆる贅沢を尽くし勝手気ままに暮らす伊達一族の四百五十石取りの飯田能登(はんだのと)

様子を気の毒、可哀想と思う心やさしく美男と唄われる喜右衛門とが不義密通の上発覚するや主人を殺して駆け落ちするという大事件だったのです。

その事件を題材に、古典芸能の一種「口説き」(単調な節を付けて、事件、出来事を物語に作って、唄って聞かせるもの。楽器、伴奏

私達(私と大船渡市の平山憲治氏・田代光子氏)は平成二年頃、この口説きの舞台を巡って写真解説付きの歌詞集を出版したいと考え事件発生地である北上町から逃亡中の立寄り先各地(ほぼ国道四十五号線沿い)お節地蔵が祀られている仙台の七北田処刑場、そして釜石まで方々を訪ね歩き

ようやく入りて、先ずは仁助に対面ありて、そこで藤七もうさるようは、これは仙台落人なるが、どうぞ二人をかくして給え…」と唄われています。
一時間の口説きの一割以上が釜石場面で、仁助夫婦のことが多く出てきます。
仁助親分の住んでいた場所はどこだったのか?

私達の歌詞集出版は見送りになってしまいました。途絶えているこの口説きをなんとか復活させて後世に伝えたいものだと思つています。
私達がこの事件を知ることになったのは、私の生家の隣家、三陸町吉浜字根白の西村家の虎治おじいさん(故人)が三陸の昔語り第一集(昭和五十四年版)に